

30人学級の考察

鳥取県教育委員会

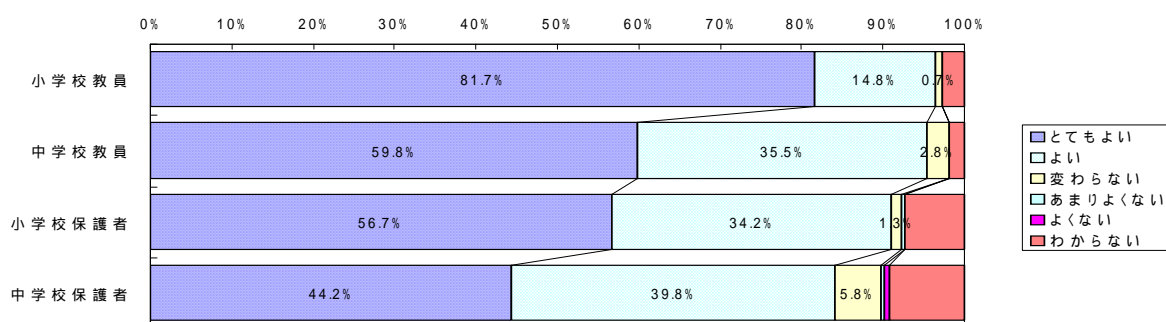
1 30人学級の実施に伴う教育効果アンケート調査結果(抜粋)

(平成16年10月実施)

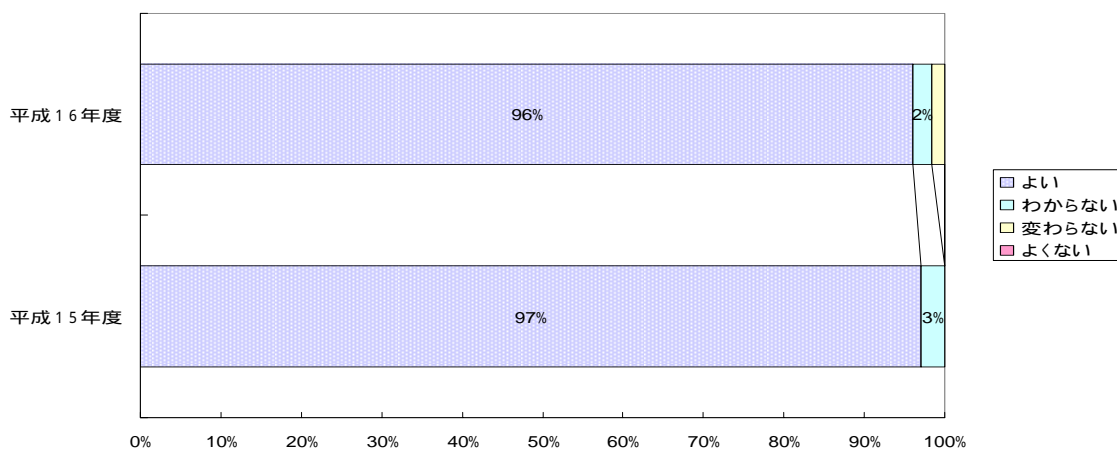
<実施対象者>

- 1) 教職員(1・2両学年で実施している小学校24校及び抽出中学校9校)
 小学校> ・ 16年度30人学級担任
 中学校> ・ 平成16年度1年生の授業を担当している教員
- 2) 保護者(抽出小学校6校及び抽出中学校9校)
 小学校> ・ 1・2年生それぞれ任意の1クラスの保護者
 中学校> ・ 1年生の任意の1クラスの保護者

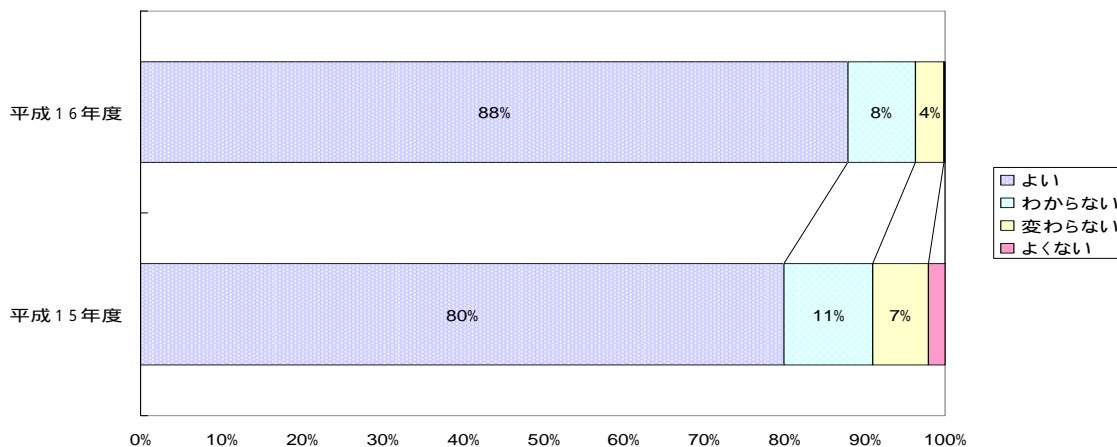
30人学級になって



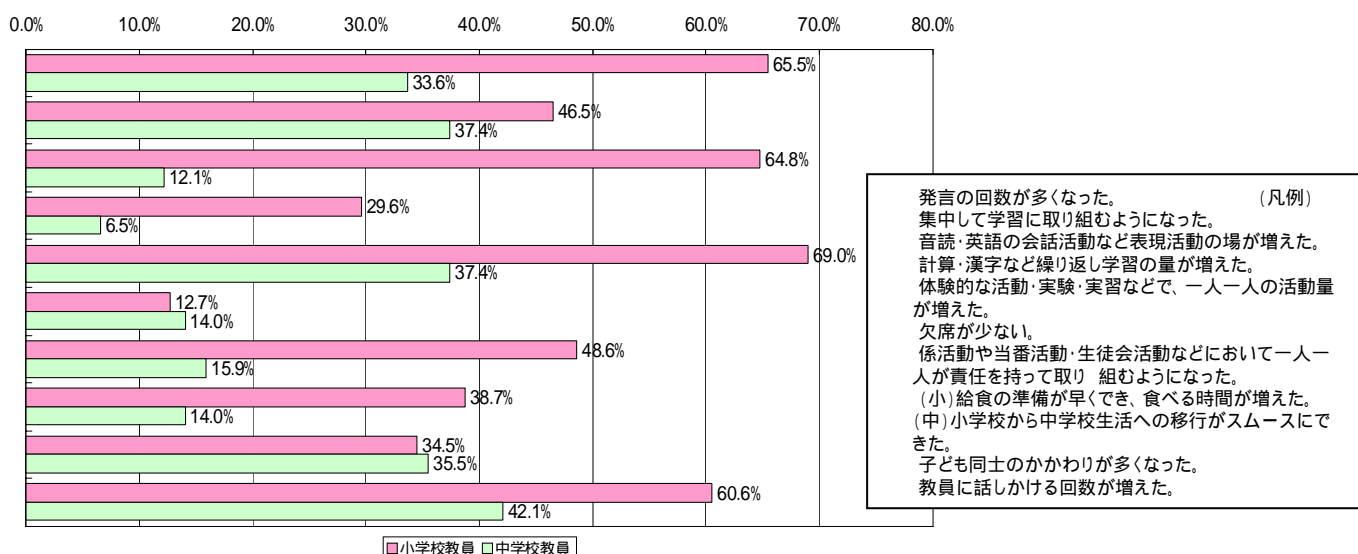
30人学級になって(小・中学校教員)



30人学級になって(小・中学校保護者)

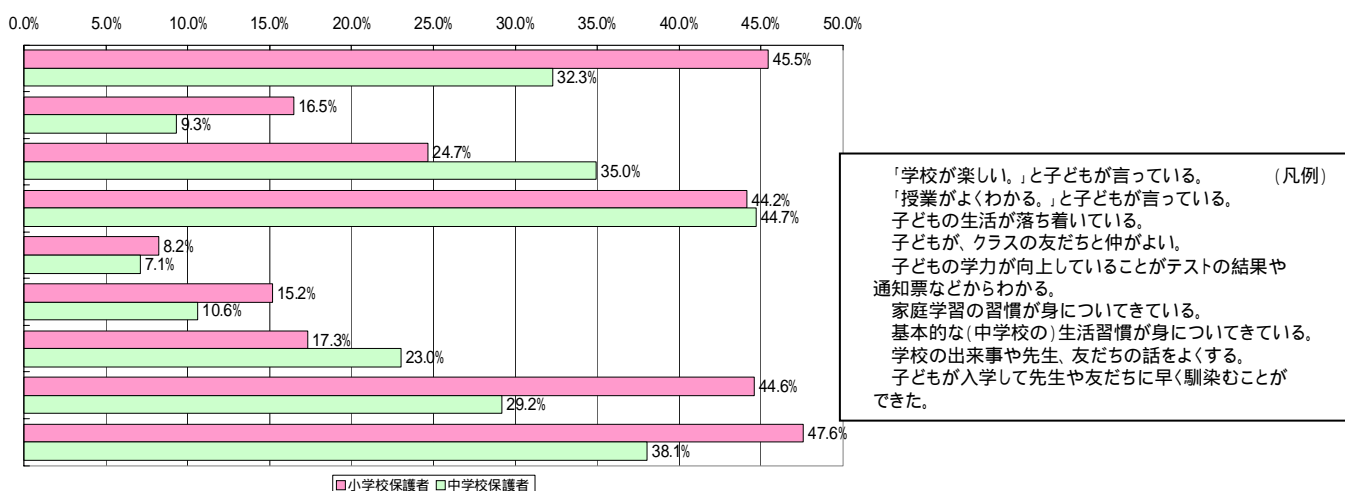


効果があったこと（小・中学校教員）



- ・全体的に小学校教員の方が効果があったと感じている割合が高い。
- ・小学校では「発言の回数が多くなった」「一人一人の活動量が増えた」「教員に話しかける回数が増えた」などの面に効果があったと答えている教員の割合が高く、子どもたちの学習場面や生活場面での積極性の向上に効果がうかがえる。
- ・中学校では「子ども同士のかかわりが多くなった」「教員に話しかける回数が増えた」など、人間関係、信頼関係の向上に効果があると感じている割合が高く、そのことが「集中して学習に取り組むようになった」ことにもつながっていると思われる。
- ・「表現活動の場が増えた」については、小・中の差が最も大きい。もともと小学校の方が表現活動を設定する場面が多いことも考えられるが、中学校での指導方法にも工夫の余地があることが考えられる。
- ・課題として「繰り返し学習の量が増えた」に効果があったと答えている教員の割合が少ないことから、繰り返して学習するなど、30人学級の特徴をふまえた指導方法を工夫することが必要である。

子どもの様子（小・中学校保護者）



- ・保護者が「子どもの様子」から感じている効果については、項目ごとで多少差はあるが、小・中学校とも似たような傾向を示しており、「クラスの友だちと仲がよい」「入学して先生や友だちと早くなじめた」など、人間関係面での効果をあげている割合が高く、中学校入学時の様々な不安を抱える子どもたちに対し、よい結果を生み出していると思われる。
- ・授業や学力、家庭学習に関する項目での割合が低いことから、学習指導の工夫や、保護者と連携した学習習慣の形成が課題である。